

第3回世界宗教者平和会議

プリンストン宣言

1979

9月7日アメリカ合衆国・プリンストン

前文

1979年プリンストンで開かれた第三回世界宗教者平和会議は、貴重な伝統を継承するものである。1970年京都における第一回世界宗教者平和会議、ならびに1974年ルーベンでの第二回会議は、宗教が種々異なっても、めざす目的は基本的には一つであることを天下に明らかにし、平和のために諸宗教が協力する道を拓いた。世界のいくつかの地ではなお宗教紛争がその傷跡をとどめるが、主要な諸宗教の信者どうしの間に、相互理解と互敬の念が次第に高まりつつあることを、われわれは喜びとするものである。過去二回にわたる世界宗教者平和会議において、われわれはそれぞれ自らの宗教信仰に忠実でありながらも、他の人びとがその信仰と宗教活動に献身するさまを尊重し理解することを学ぶにいたった。

この相互理解をさらにつちかい、平和・正義・人間の尊厳をめざす活動を育成することをわれわれはここに誓う。いまやわれわれは、世紀の交替を迎えようとしているばかりでなく、世界の文明の存続が危惧される人類の歴史の転換期にさしかかっている。この認識に立って、われわれは「世界共同体を志向する宗教」を本会議の主題として選んだ。

この主題をめぐって、47カ国から、仏教、キリスト教、儒教、ヒンズー教、ジャイナ教、ユダヤ教、イスラム教、神道、シーク教、ゾロアスター教をはじめとする諸宗教の代表者354名がここに集った。この会議そのものが世界共同体を象徴することをわれわれは喜びとする。人間の尊厳を否定する勢力は強大で、われわれの周辺をすべて取り囲んでいることをわれわれは知っている。死の核兵器の脅威と、やる方ない国家の不安とをわれわれは眼のあたりにする。技術と経済の力はしばしば世界の貧しい人々を犠牲にし、除け者とする。政治権力はしばしば異を唱える人々を抑圧し、人権を否定する。さらにまた、あくなき人間の欲望は、われわれすべての生を支える自然環境を破壊する。これらの諸勢力に立ち向かうには、われわれ宗教者の見るところ為すところは、あまりに微力に過ぎるかもしれない。それゆえにわれわれは、謙虚ならざるをえない。とはいえ、われわれは、与えられた宗教と信仰の賜物をもって、われわれと世界の前に立ちはだかる危険に対して敢然と立ち向かうべく、差し迫った思いをもってここにつどう。

平和は可能である——われわれの確信

自由と正義、真理と愛の上に打ち立てられる世界共同体とは、平和の別名である。世界共同体はわれわれの全努力目標である。それは実現不可能な夢ではない。先細り行く資源の獲得競争が激化し、経済権力の中心に位置するものが収奪を強化し、核兵器の貯蔵が増大するなかで、絶望への誘いに屈せず、われわれは希望の精神を抱いてともに集った。異なる宗教に属するとはいえ、われわれはひとしく一大人間家族のメンバーであることを思う。われわれすべてを生かすための霊的な力に支えられ導かれて、われわれは暴力に代わりうる手段の存在することを確信する。平和は可能であるとわれわれは信ずるものである。

これこそ、諸宗教の信仰者としてのわれわれにとどまらず、全世界とともに分かちあうことを願う希望である。われわれは、共同体形成のより有力な担い手たるべく、その務めに邁進する。われわれは信仰者ならびにすべての人々に向かって、この希望を分かちあい、その実現に努力するようともに誓いあおうではないかと呼びかける。

われわれは信仰者として、平和的世界共同体の形成に特別の責任をもち、独特の貢献をなし得ると信ずる。

たしかに、あまりにもしばしば、戦争や社会的抗争のさいに、われわれの属する様々な宗教の名義が用いられてきた。かかることのないようわれわれは一層の努力をしなければならないと思う。

われわれは認めざるをえない——

われわれの宗教教団の行いが、時として世界を分裂させる力となることを。

この世の権力が悪を為すときにも、われわれは宗教が教えるところの言葉をもってこれに立ち向かうどころか、あまりにもしばしばこれに屈してしまうことを。

苦しみと犠牲にあえぐ人々の奉仕者、代弁者として、為すべきことを十分に為しえなかったことを。

偏見のうずまく地域の場にあつて、われわれの間に宗教の相互理解と、宗教者どうしの交わりを築くにあまりにも非力であったことを。

とはいえ他方、この会議において、われわれは、自らの間にとどまらず、世界のうちに平和を築くために、深遠なる賜物をわれわれが共有することをあらためて自覚させられるにいたった。

異なる宗教に帰依するものとしてわれわれは、信仰と礼拝の対象を異にするかも知れない。とはいえ、信仰を行わずることにおいて、われわれは、自らの信ずる神または真理はこの世の権力や分裂を超越するものであることをひとしく告白する。われわれは、仕えられる主人ではなく、仕えるしもべ、証し人であり、礼拝と冥想と実践において、自らの告白する真理によってつねに変革され鍛練される。

われわれはみなひとしく、愛とゆるしの交わりにおいて自らを制し鍛練することが人間生活の基本であり、かつ真に祝福された状態であることを認識する。

われわれはすべて、信仰の命ずるところに従い、自由にして平等なる人格的交わりにおいてこの世の正義を追い求める。これを追い求めるにあたって、われわれすべてのうちにある真理への道徳的導き手として、各人に良心が与えられている。

世界共同体における平和は、可能であるばかりでなく、地球上の人類にとってそれ以外の生き方はない。われわれは、祈りと冥想と信仰によってこれを学び、かつ信ずる。

以上の確信をわれわれはともに分かち、それゆえにわれわれはさらに前進することができ、この世における宗教的証しが多くの実を結ぶという確信をともにしうる。

われわれは信ずる——

能動的な愛の力は、正義の追求にあたって人々を団結させ、世界をあらゆる不正、憎悪、邪悪から解放することを。

共に苦しむことを通して、われわれが覚らしめられるのは、われわれが兄弟姉妹であり、その苦しみの根源を克服すべく召されているということ。

現代の文明はいつの日か変革され隣人愛の善意と頼もしい助け合いの精神が育まれることを。

すべての宗教が、ますますその協力を密にし、責任ある世界共同体の創造に向かうことを。

これらのことを信じつつわれわれは、平和と世界共同体に関連する特定問題領域に眼を転ずる。

平和のための動員——われわれはの実践課題

A 公正なる国際経済秩序

開発途上にある世界で八億の人々がいまもお貧困のうちに生活し、さらに幾千万、幾億という人々が身体の障害ゆえに働くことがままならず困窮し、そして世界人口の4割は読み書きをなしえない。これらのことに良心的屈辱を覚えないでおれようか。この十年間に、先進国と開発途上国との経済的格差はさらに広がった。すべての主要な宗教が社会的経済的正義を唱え、大地の恵みにあずかる万人の権利を強調することにかんがみ、われわれは世界中の宗教者に対して、自然と調和する尊厳性・人間性が何びとにも拒否されないような公正かつ公平な経済秩序に向かって努力することを訴える。

正義と公平を増し加えるかかる新国際経済秩序は、諸国民が自立自存の国民経済を達成するにあずかって力となり、依存ではなく対等の基盤に立って国際貿易に関与することをえしめるであろう。この新たなビジョンを実現するためには、世界的に均衡のとれた経済成長を促進し、それによってもたらされる経済的恩恵を、貧困の廃絶、すべての基本的人間要求の充足、工業国、途上国間の公平な貿易関係の創

造等にふり向ける政治的社会的意志が存在しなければならぬ。われわれは、宗教者に対して、各自の国における経済的社会的不正の制度を排除し、貧困克服計画を支持する政府・民間の世論を動員するよう呼びかける。われわれは経済的資力を有する全宗教教団に対し、社会の改善、窮乏の阻止、貧者の救済のために働くことを訴える。

われわれは宗教的責任感に基づいて、真の開発には、社会主義と、意志決定への民主的参加が不可欠であるとしてくり返し主張せざるをえない。またいかなる経済体制に属する多国籍企業や会社であるをとわず、それらが不当な経済的社会的権力をその受け入れ国において行使することのないよう、然るべき措置が国内的国際的にとられるべきであるとの見解を表明する。

全世界の富は、万人の共有財産として委ねられている。われわれは、全世界の資源が、浪費や枯渇をまぬがれるよう賢明に開発されるべきであり、未来の世代もまたこれに対して権利をもつことを主張する。

B 核軍縮および通常兵器の軍縮

地球上の全人類の現代における主たる懸念は、計画的または偶発的な核による絶滅の危険が重くのしかかっていることに向けられているとわれわれは信ずる。第一次・第二次の戦略核兵器制限交渉にもかかわらず、核の蓄積は増大し続けており、そのために、戦争および一切の大量破壊兵器を非合法化する世界的運動の必要性がますます痛感されるにいたったことをわれわれは認識する。

われわれは、米ソ間における第二次戦略核兵器制限条約を、核軍縮を助長する一つの望ましい進展として理解し、その批准と、第三次戦略兵器制限交渉の速やかな開始とを希望する。核兵器の拡散、超大国間の軍備競争、そして世界中の通常兵器競争の拡大に反対することは、宗教教団の責務である。核保有国は、非核保有国に対して核兵器使用のおどしを行ってはならない。

われわれは各国政府、宗教団体、およびすべての良心と信仰の人びとに対して、国家間および国民ど

うしの間におけるいかなる種類の戦争にも反対する地球規模の道徳的宗教的一大運動を呼びかける。この運動は非武装と非暴力的安全保障手段の達成に向かって努力しなければならない。そのために先ずなすべきことは、諸国民の間に信頼の気運を醸成し、和解の精神を涵養することである。

以上の目的を追求するに当り、差し当って次の措置がとられるべきことをわれわれは提案する。

- 核兵器その他の大量破壊手段のあらゆる実験、研究、製造、拡散、展開の停止
- 全面的核実験禁止条約
- 以上の措置の実施を確実にする有効な検証方法
- あらゆる大量破壊兵器の使用を人類に対する罪として宣言し、これに反対する国連規約

兵器への依存を少なくするためにわれわれは、国連による国際的安全保障機構の強化、すべての国々が安全保障理事会のすべての決議を無条件に実施すること、現在の勢力均衡概念に代わるものとして国連憲章に合致する集団安全保障体制の確立などを提案する。

年間四千億ドルにまで撥ね上がった軍事支出の大幅な増大に対してわれわれは深い憂慮を表明する。幾百万もの人びとが空腹のまま眠りにつく一方、各国とその政府は社会主義の要求を無視してそのもてる資源の多くを軍備に当てるということは、まことにもって無慈悲な皮肉というべきであろう。このゆえのわれわれは、各自が属する社会の構成員とその指導者に向かって、自国の現在の軍事支出を大幅に削減し、それによって生み出された資金を世界中の開発に用いるためにありとあらゆる政治的道徳的影響力を行使すべきことを訴える。

C 人権

京都およびルーベンにおいてなされた国連人権宣言に対する熱烈な支持をわれわれはここにあらためて確認するとともに、個人、ないし社会に対するいかなる人権の否定をもわれわれは慨嘆する。われわれは、真摯な人権闘争を遂行して人権侵害に抗するすべての結社、組織、団体への支持を誓約する。われわれは一切の宗教的差別を糾弾し、国連に対して、「宗教ないし信条に基づく非寛容および差別の撤廃に関する宣言、および規約」を採択するように切に

要請する。われわれは市民に対して良心的兵役拒否の権利を是認する。われわれは、宗教団体が自国の政府に対して、人権の擁護と促進に関する国連のあらゆる宣言、協定、規約を批准しかつ施行するように働きかけることを強く要望する。われわれの帰依するすべての宗教は、強者に対して弱者を保護し、抑圧者に対して被抑圧者の味方となり、人間の生命、良心、表現の自由、万人の尊厳性を尊重することをわれわれに命ずる。われわれは人種主義ならびに人種差別の反対に関する国連の宣言および規約を支持し、すべての政府がこれを遵守するように切望する。アパルトヘイト（人種隔離政策）に反対する国連の諸措置は、あらゆる国家、機関、個人によって実行されるべきである。

この世界宗教者平和会議が国連の国際児童年と時を同じくすることにかんがみ、われわれは、人類が「子供には与えうる最善のものを与えなければならない」とし、かつ、子供は、「理解、寛容、諸国民の友好、平和、四海同胞の精神をもって」育てられるべきであるとする国連総会の1959年宣言を信奉することをあらためて主張する。われわれは全世界の宗教者に対し、一人一人の子供に、より良く輝かしい未来を保証するような社会・経済・人口政策を各国が採択するように支援し協力することを訴える。青年は、宗教の平和運動に積極的に参加することが大切であり、宗教を異にする青年たちの合同集会がもっともたれなくてはならない。

すべての人間は、生まれながらにして自由であり、かつ自由なるべく定めている。また、すべての人間はその尊厳と権利において平等であり、性別による一切の差別は人間の尊厳と相容れないとわれわれは主張する。男性と並んで女性が自分たちの国の政治的社会的経済的文化的宗教的生活に十分に参加することを妨げるような習慣、偏見、法律は、道徳的にみて弁護の余地がなく、撤廃されるべきものであるとわれわれは確信する。

D 環境とエネルギー危機

地球は、人類が物質的繁栄を追求して環境をみだりに利用したために、その危険度を増大させている。われわれは再生不可能な天然資源を枯渇させ、化学物質や放射性廃棄物によって大気や水を汚染し、世界の各地で土壌を荒廃させることによって将来の世

代を危険にさらしている。エネルギー危機が眼前に迫っている。石油の供給が減少していくなかで、各国民も個人も、犠牲を忍び、できれば、再生可能な代替エネルギー源を開発し、自らの生活様式をも変えるようにしなければならない。すべての宗教のもてる力を結集して、われわれの住む自然界に対する畏敬の念を養成し、その資源の保存につとめ、自然の一切と調和する人間生活の様式をつちかうようにしなければならない地球上の民は、地球の富が浪費されないように有限なる地球資源を保存しなければならない。

（注）本会議は、核エネルギーの開発を続けるべきではないとする参加者の中の幾人かの見解をここに書きとどめる。

E 平和のための教育

世界の諸宗教団体は、諸国民諸文化の相互理解を深め、平和の諸価値への献身を育くむような一大教育プログラムを大いに推進しなければならない。これまでのわれわれの努力は満足すべきものではない。それゆえにわれわれは決意を新たに、児童、青年、成人の教育や宗教指導者の訓練につとめ、個人的公的生活におけるわれわれの行動を通して、平和の価値をひろめ、理解を促進すべく献身する。

究極のところ、平和と正義は、全人類の救済と完成に向かって進むものであるとともに、またそこから溢れいづるものである。偉大なる諸宗教に帰依するものとしてわれわれは世界を癒す霊的な力を通わせる水路とならなければならない。われわれは、この気高い務めにふさわしくないことを告白するとともに、ここにその忠実なしもべとなり証人となることを新たに誓うものである。万人に正義をもたらす世界共同体における世界平和は、決して不可能事ではない。この会議にわれわれを集わしめた信仰と希望は、ここで共に過したことによってさらに育くまれ、強められたとわれわれは信じる。この信仰と希望が、われわれの属する諸宗教の全生活にわたって同じように分かたれるならば、そのときついに、人類の営みに新たな力が増し加えられ、世界に新たな時代が始まるであろう。それが成就されるためにわれわれは祈りかつ働くものである。

Religions for Peace 